

話題 5 7

「患者学」のススメ ～「情」も「報」も必要～

世界保健機関憲章には、「健康とは、完全に身体的・精神的・社会的に良い状態であることを意味し、単に病気がないとか、虚弱でないということではない」と記されている。

残念ながら、この定義に適う健康な人間は世の中には存在しない。健康と病気の間には連続性があって、日常生活に支障のない病的な状態もあれば、逆に支障をきたす健康的な場面もある。健康状態は日々変化するものであることは誰しもが感じている。

よって、人は皆が「患者」であり、不完全な存在であると捉えたほうが正解だと考えられる。不完全さを修正して、より「健康」な状態に近づくための「患者学」について、いくつかの参考書を紹介したい。

一、上野直人著「最高の医療を受けるための患者学」（講談社α新書）：著者は、米国で活躍する腫瘍内科医。日本の医療の欠陥を指摘し、提供される医療から参加する医療への変革が必要であり、日本の医療を良くするには患者さんが賢くならなければならないと指摘している。他に、「一流患者と三流患者～医者から最高の医療を引き出す心得」（朝日新書）がある。

二、平松 類著「伝え上手な患者になる～医者へ何を話してよいか分からないあなたへ」（自由国民社）：眼科医。医者まかせにして後悔しないために、ロベたでも簡単にできる「病院へのかかり方」を解説。

三、磯部光章著「話を聞かない医師・思いが言えない患者」（集英社新書）：循環器内科医。人はそれぞれの自分の「物語」を生きており、病気もその一部。病気への対応は、患者がどのような人生を生きてきたかという文脈の中で判断すべきであり、医師は患者が育てるもの。

四、里見清一著「医者と患者のコミュニケーション論」（新潮新書）：腫瘍内科医。辛口の解説書。他人の不幸で成り立つ商売。医者は病気を、法律家はトラブルを、そして宗教家は死を飯の種にしている。「治す」ことは時々しかできない、「和らげる」ことはしばしばできる、「慰める」ことは常にできる。

五、尾藤誠司著

「医師アタマとの付き合い方～患者と医者はわかりあえるか」（中交新書ラクレ）。臨床疫学。：インフォームド・コンセントとは、説明と同意ではなく、説明と合意。「あなたの事情を色々考えると、こちらの方がいいと思いますよ」というアドバイスがあって初めて「報」だけではなく「情」を伴う医療情報となる。

「情」もあり、「報」もある「かかりつけ医」を持ちましょう。